

岳南の球神「加藤周蔵」様（16期生野球部遊撃手・明治15年2月生-昭和23年6月没）

大正5年から野球部コーチ監督。大正15年夏全国優勝監督。



明治31年チームの3年生遊撃手加藤周蔵（前列右端）↑

育成期の人々



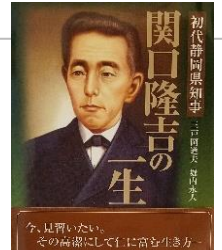
丸尾 晋



加藤 周蔵

理数の秀才加藤周蔵は旧制四高（金沢）を軍人教官に反抗して自主退学。横浜の外国商社技術系社員で活躍後、大正5年郷里静岡に戻り、丸尾晋眼科医先生と静岡野球部の本格的育成指導に乗り出す。

周蔵の父、関口隆吉は幕臣、山岡鉄舟等と生命を懸け維新に対応し、牧之原で茶栽培を創始。明治政府の懇請で山形県礼、山口県令、静岡県礼に就き、徳治を以てわが国の近代化に全身全霊を捧げ尽くす。↓



←大正11年死球で他界した鈴木成次主将（中央）周蔵「成ちゃんを勝たせるぞ」

周蔵の兄関口壮吉は東大理科卒化学博士で浜松高等工業初代学長。次兄新村出は東大文学部首席で文学言語博士、広辞苑を編纂。弟鯉吉は東大理科卒気象博士東京天文台長。明治40年6月に兄弟は仲睦まじく周蔵の婚礼（静岡）に集う → 真中奥の赤子が、大正13年夏に甲子園初の満塁弾を打つ田中一太郎（甥）2列目右寄りの赤子は大正15年本多二塁手(甥)

↑尾焼津井次（神部八百）著「写真屋監督」（絶版）に周蔵の天才的で人間的な、たぐい稀なる人生、静中全国制覇への軌跡が生き生きと描かれている。21章「羊から猛虎へ」（上掲）では大正15年の冬から夏にかけて、福島鏑主将捕手、上野精三投手等選手と修練に明け暮れる周蔵の崇高な日々が蘇る。



↑加藤周蔵撮影

大正15年福島鏑主将捕手→甲子園通算11安打、抜群リード・天才的盗塁刺殺と獅子奮迅の活躍。慶應の主将。昭和8年結核で他界。享年26。

←周蔵監督が新聞社の依頼で執筆した甲子園優勝の記録。莫大な私財を投じ、人生を静岡野球に懸け尽くした周蔵は、この稿の中で、親友飛田穂州とも言葉を交わし静岡野球の真髄を語り、「静岡市民（の応援）」と再三繰り返して「浅間神社の大祝勝会」「全市民の提灯行列」と書きしるした。

←大正14年レギュラー打撃。左から塚本（右）田崎（三）戸崎（左）上野（投）河島（中）福島（捕）国友（一）

かくして我等は勝つ

ベンチナース 加藤 周蔵

静中が静中の優勝を予想するものがある。それは明治27年静岡中野球部が誕生して以来のことである。30年余、当時愛知一中・愛知一校の両方にベンチナース・加藤周蔵氏の血と魂の力があった事を記してはならぬ。記しては静中野球と同時に関東の苦心を記す必要に迫られる。大正15年、静中野球部は、大正15年夏の甲子園に出場した。以下は記述を断つ。（大正15年、静岡新聞掲載）

選手も先輩も私に付いた。12回の組合中優勝は受賞された。静中は不戦3勝、14回は甲子園に出場した。15日午後、静中野球部は、大正15年夏の甲子園に出場した。以下は記述を断つ。（大正15年、静岡新聞掲載）

12回の試合には選手の前、バックスクリーンで大勢の大勢、静中野球部は、大正15年夏の甲子園に出場した。以下は記述を断つ。（大正15年、静岡新聞掲載）

2

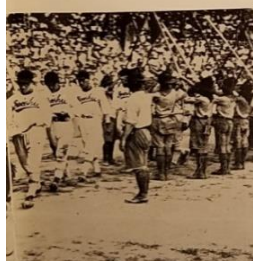
アツク本場の職人チーム。日本でも大正15年夏の甲子園に出場した。以下は記述を断つ。（大正15年、静岡新聞掲載）



福島 鏑主将



上野 精三投手



一躍する静岡中ナイン



優勝した静岡中ナイン



七間町通りをパレードする選手（上）と静岡新聞の報道